

# 2011年ひとり路草放題さくら道

(2011年4月29日～5月1日)

山猫@滋賀

## ■はじめに

1年前、あれほど復活を楽しみにしていたさくら道だったが、前半の美濃までは気温も低く快調に進めたものの、以降は歩きが目立ち、大和では歩道と車道の分離帯に足を引っ掛けて転倒、左膝には一生傷をわずらい、その後も左膝は違和感が残ったままだ。結果的に白鳥エイドで寒さのため、手が震えてからは雨も降り、蛭ヶ野では完全に寒さと眠気で前に進めなくなってしまい、荘川桜手前でバスの時間を意識し始め、写真を撮りまくって時間を稼いだ。そして、田口建設エイド先の平瀬バス停でリタイヤ宣言した。そこからは白川郷にバスで向かい、リタイヤされたランナー達と白川郷で散策後は高速バスで金沢に向かった。バス車内ではさくら道を愛する多くの仲間達と楽しいひと時を過ごせ、リタイヤした悔しさは微塵もなく、楽しかったさくら道の思い出しか残らなかった。

そして、9月になって2011年さくら道ウルトラ遠足の案内が送られて来たが、申し込まなかった。大会という時間の枠を決められてしまうことによるストレス、時間に追われない自分自身のさくら道にしたかったからだ。多くの仲間と一緒に時を過ごしたいという気持ちより、1994年のGWに映画「さくら」を見たあの時の込み上げてくる感動を常に味わいながら、さくら道を旅したいという自分の気持ちを抑えることができず、大会よりひと足早くスタートして、ノンサポートで金沢ゆめのゆを目指すことにした。

練習も全くできていないので、どこまで走れるか、歩き続けられるか疑問ではあったが、苦しい時、辛い時、いつもさくら道は澄み切った青空、爽やかな空気で迎えてくれた。今年もそんなさくら道に逢えることが嬉しくてたまらなかった。

今年は2月から仕事が忙しく、連日遅くなる日々でとても思うような練習はできなかった。年末からは昼休みに構外や団地内をウォーキングして、それも距離の内と累計に加算、月間距離300kmにこだわり続けたが、距離も思うように伸びず、加齢と共にダウンする気を感じながら、4月末が近づいていた。

どこをスタートにするかだったが、岐阜駅か、尾張一宮駅かどちらか決めかねていた。尾張一宮からだとしき家で昼食を食べられるし、店も多いので距離は12kmほど長くなるが、尾張一宮にしようと心の中では決めていた。尾張一宮からだとは231kmになる。

## ■当日

前夜の帰宅は21時頃で、それから慌てて荷物やケアの準備をしていると寝たのは0時半を回っていた。そんな睡眠不足状態で朝7時に起きて朝食。朝の慌ただしい時間の中、足にキネシオテープを巻き、すぐに走れるウェア姿の上にシャツとズボンを履いて、8時頃に出発する。

外は曇り空で風も強く、いつ雨が降り出しても不思議ではないような肌寒さを感じる天気だった。天気予報では傘マークはなかったはずだったのに。いつものことだが、車窓から見えるGWの風景、それは田舎の百姓はどことも田植えの準備に大忙しだ。菜の花が一面咲いている田があり、となりの水が浸された水田とのコントラストが鮮やかだ。こんな風に思えるのは百姓育ちだからか？。彦根付近だろうか、工場の煙突から煙が上がっていた。煙を見ていると、その瞬間しか同じ形はない。たかが煙、されど煙に思え、ずっと見ていると飽きない感じで芸術的に思えた。

米原で乗り換えするが、米原駅は改装工事が終わり、綺麗になっていた。しかし、米原駅は昔の古びた雰囲気似合うような気もする。駅構内には大河ドラマ「江・浅井三姉妹」の影響か、いつもよりラフな服装の人が多く、登山姿の人目も目立った。この時点で「尾張一宮」まで行くことに決めた。岐阜からは乗客も多くなり、みんな名古屋屋に向かうようだ。

「尾張一宮駅」には10時20分頃に着いた。駅構内は工事中で、駅前に出るとそこはさくら道のコースとなるが、30km手前で、いつもサツ～と通り過ぎる場所なので、この駅の印象は薄い。駅前の「サンクス」で荷物を金沢に送る手配をする。ゆうパックは1200円で、2年前に岐阜からクロネコヤマトで送った時より70円安かった。曇っていた空も明るくなり、青空が広がっているが、肌寒い風の強い天気には変わりない。ここでもトイレに行った。今日4回目の大きい方のトイレで胃腸に緊張があるせいだろうか。



## ■ひとりさくら道スタート

JR尾張一宮駅(スタート)

4月29日 10時51分

乾燥した空気の中、ゆっくりと歩道を走り始める。寝不足もあり、足取りは重く、先が思いやられそうだ。走り出してすぐの交差点では右翼の大型街宣車がボリューム一杯にして、通り過ぎて行った。そういえば、今日は天皇誕生日だった。左側には大きなイオンモールがあり、昼前とあって車の出入りが激しく、ガードマンの指示に従う。

JRと名鉄の「今伊勢跨線橋」の上りはかなりきつかった。久々に荷物を持って走るの辛い。この辺りは店も多いが、とりあえず目指すのは「すき家」のみ。しかし、肝心の店が見えてこない。スタートして40分あまり、やっと店が見えた。店内に入るなり目に付いたのは大好きな白ネギの乗った「白髪ねぎ牛丼」、白ネギの上にゴマダレが掛けてあって、長い道中のスタートには格好のスタミナ源だった。食べ終わったと思ったら、またトイレに。朝起きてから5回目、何たることか！。



乾いた肌寒い向かい風が吹く中、雲もそれなりに掛かっているので強い日差しではない。「木曾川」に掛かる「木曾川橋」を渡る。新緑が綺麗で、シルバーの木曾川橋も映える気がする。歩道の間で下を眺めるとそこは木曾川。川面が濁ってい



て、情緒を感じさせてくれない。歩道のない道路の脇を下って行くと「栄町西」交差点。ここを右折する角に「笠松ペットセンター」がある。檻の中ではあるが、カメラを向けると毛色の良い可愛い犬達が近寄って来てくれた。

その先を進んで行くと昨年この辺りでN川さんと出会ったのを思い出す。そういえば、N川さんは「来年出たい」と言われていたが、今年の「さくら道」に参加されているのだろうか？。この辺りも向かい風が続いたが、ほぼ走り通せていた。左右をキョロキョロしながら進んで行くと「加納」という名前があった。そうだ岐阜は中山道の時代は「加納宿」で、途中で止まったままになっている中山道だが、この辺りを横断して進んだ記憶が蘇ってきた。

真正面に緑鮮やかな山が見え、この手前の「金津町四」を右折する。ここを左折すると美川憲一の柳ヶ瀬ブルースに唄われた繁華街「柳ヶ瀬」に行けるようだ。ここからは風向きが変わり、また左に山がある関係で蒸し暑く感じるようになった。この付近は変化がなく疲れるところだ。左の山を見てい



ると山を直角に削った下に民家が並んでいて、山崩れが起こったら大変な地形だ、何て思いながら進む。左に「白山神社」が見える。手前は石の鳥居だが、次の鳥居は赤なので稲荷神社のようだ。



ここから道路左側は6、7年前に廃線となった名鉄線の面影が残る部分で、頭上いっぱいには被っている新緑とホームの石垣が何ともいえない哀愁を漂わせる。2004年にひとりさくら道した時にはまだ電車は走っており、私はこの電車に乗って美濃まで行った。懐かしくもあり、寂しくもある光景だ。日野南に向かう辺りは歩道が狭くなる。右に東海学院大学が見え、国道を横断する道路には「女子大生通り」と書かれていた。どこに女子大があるのか？、それともこの大学は女子が多いのか？、何か不思議に思えた。周囲を見渡すと新緑が鮮やかで、あちこちに見える淡い緑一面の小山とのコントラストが良い。

### 日野南6丁目交差点(19.7km) 4月29日 13時28分

「日野南6」を過ぎると岩田坂の上りに掛かる。緩い坂だが、へばってきたので歩くことにした。上り終えた辺りから店が多くなってきた。昼食を食べてから2時間しか経っていないが、たつぷりと時間を掛けた道中になるので、二度目の腹ごしらえをすることにする。ちょうど「吉野家」と「餃子の王将」が並んでいたの、スタミナを蓄えるために餃子一人前を注文する。たかが餃子なのに手元に届くまでかなり時間が掛かった。6個入りが210円し、王将の餃子は189円とばかり思っていたら、値上げされていた。そういえば2年以上、王将で餃子単品を買っていないように思う。我々のところにある王将に比べて、若いアルバイトばかりの印象で段取り良く仕事しているようには思えなかった。これで当分腹は持つだろう。

店を出てしばらく進むと左足底に違和感が出始めた。たまたま右側にスギ薬局があったので、店内でカットバンと靴下を買う。十分に確認していなかったため、昨年さくら道で履いた100円の5本足靴下は左足底に穴が開いていた。パッド状のテープと100円靴下を買い、すぐに左側だけ、靴下の履き替えした。左右は片ちゃんばだが、片足は予備として使える。ずれたテープを剥がし、先ほど買った新品のテープを何枚も貼る。パッド状テープの効果は大きいと思っていたが、どうもそれほどでもないようだ。

その先に「棚橋工業」(24.9km)が見えて来た。棚橋工業前を14時に通過。関は近い。この先は緩い下りが続くが日差しが強くなり、かなり汗が吹き出して来た。まだ25kmを過ぎたばかりなのにかなりへばってきた。1年前より体力が落ちたと感じる。空を見上げると灰色の雲が覆い、風も出て、いつ降り出すかわからないような空模様が変わっていた。



辺りが空いてきたので、また向かい風が強くなり始めた。部活帰りだろうか、多くの中学生男女とすれ違う。右に「平成コブシ街道」が見えるが、周りの新緑があまりにも鮮やかなので、枝だけの並木道は何故かこの時期、みずぼらしく見えた。この交差点の右前にはスーパー・ベイシアを中心とした「カインズモール」が営業をしていた。かつぱ寿司もある。1年で大きく変わっていた。特にこの辺りの歩道は凹凸があったが、ショッピングモールができたことで5、6m以上の幅がある新しい歩道に生まれ変わり、快適に進めるようになった。反対側の中に入ったところにある脇道も工事中で、1本で繋がってしまえば走りやすい道になるだろう。



う。

「栄町4丁目」で左折するが、この交差点は年々狭くなっているように思えた。実際はそんなことはないが、何故だろうか？。もう走れなくなり、完全にグロッキー状態に陥っていた。関に入ってから概ね風が止まり、先ほどの天候が嘘のように青空も広がり、陽も差し込み、かなり蒸し暑い。そして、強烈な日差しに変わってきた。関と美濃の境目がわからず、いつも知らないうちに美濃に入ってしまった気がする。水分も切れたので右側にあったミニストップに寄る。ミニストップはテーブルがあるのでミネラルを飲みながら、外を見てひと休みする。窓越しの日差しは強烈だった。

いつものことながら、この付近は歩道も狭く、凹凸があって進みにくく、決まってグロッキー気味になるところだ。うだつの町「美濃」だが、通っていても何もうだつらしきものが見えないことは寂しく思う。そして、間もなく美濃市役所だ。



### 美濃市役所 (37.4km)

4月29日 16時25分



美濃市役所のすぐ先には「長近の松」という盆栽を大きくしたような立派な松の木が1本、国道156号線脇にあり、今から400年余りに金森長近が旧美濃町の古称である上有知(こうづち)の町づくりを行なったが、先駆者・金森長近を称えて「長近の松」と名付けられたそうである。「泉町」交差点を左折すると下り坂が続き、その先には長良川も見えてきた。信号待ちの車が列をなしており、今年は例年になく車が多いようにこの地点で思ったが、その先もずっと車は多かった。



ここからは冷たい向かい風が変わり、今までとは別世界みたいだった。やっと気持ち良くなった。下ったところに道の駅「美濃にわか茶屋」があるので寄る。隣接するサークルKで焼鮭のおにぎりをかう。35円引きの100円だった。丸ごと木のレストランがあったので、何も食わず、タダの水を何杯か飲んで喉を潤す。長く走り続けることはできない状態だったので、道路右側歩道を走ったり、歩いたりを繰り返して進む。毎年の如く、コインランドリーの横にある水道の蛇口を捻って顔を洗い、冷水を飲む。冷たくて気持ち良い。その先には50円自販機があった。安物コーヒーとはいえ50円は安い。カーブと表示されたいつもの掲示板の路面温度計は17時になっていたこともあり、15℃と低くて去年並みの寒さだ。



「みちくさ館」の手前で右の旧道に入り、立派な旧家を眺める。昔の武家屋敷みたいな大きな囲いのある家で、鮮やかな緑とマッチする。旧道はわずかで、すぐ国道に合流する。左の緩やかな長良川のせせらぎを見ながら進むが、風は冷たくて手袋が欲しいくらいになった。明らかに昨年より寒く感じる。この辺りからは歩き癖が始めた。南向きの車の数は例年にないくらい多い。寒いので道端で薄手の手袋をはげる。



ペンキがだいぶ剥げ落ちた青い「新立花橋」を渡ると「立花トンネル」だ。車が多いので足元が気になった。トンネルを出ると前方には鯉のぼりが見える。長良川の川幅いっぱい鯉のぼりがなびいていた。須原の鯉のぼりだ。そんなに凄い数の鯉のぼりではないのに何故か見とれてしまう。長良川側に道路を横断して写真を撮るが、車が途切れないのでなかなか戻れない。それほど車が多かった。



10年前、初めてさくら道を走った時にひと息ついていると小学4、5年の子供がアップルジュースを持って来て、渡してくれたのは、ここ須原だと思っていたが、10年経過して初めて、周りの家屋敷の位置からして、どうもここではないように思えた。ひと息ついた場所の形跡もない。この付近であることは間違いないが、確信スポットがわからない。あれは一体どこだったのだろうか？。そんなことが頭を過ぎって悩んだ。もう少し先かもわからない。良く似た場所が3ヶ所ほどあって、何せ10年も経つと結局正しい場所はわからず終いだった。

18時前だ。「須原トンネル」入口では気温が12℃まで下がっていた。その先のローソンでチョコデニッシュを買う。乗用車から降りた家族連れが、「この汚いおっさん何をしているのか？」とジロジロと眺めていた。長良川のせせらぎは相変わらず、悠々と流れていた。上を眺めると新緑の中を走る東海北陸道の高架コンクリートの色は自然の中には溶け込んでいないと思えた。比べて、錆び付いた青色の長良川鉄道鉄橋の方が自然に融合している

ようだ。その時、紅色の長良川鉄道の車両が通り過ぎて行ったので、思わずシャッターを押す。



道の駅・美並「木遊憩所」(47.5km)には18時23分に到着。うどん屋も閉まっていた、わずかに車が止まっているだけだった。日暮れ間近とあって、道路の外灯も点灯していた。休憩所の中に入ると畳風の横になれる場所もあり、ここでカットバンを貼り替え、10分ほど目を瞑って横になる。外は肌寒いが、ここにいると安楽の地だ。しかし、先は長いので長居できない。ここで長袖を重ね着する。

少し足を伸ばして休んだお陰で走り出すことができた。その先にある八坂集落のカーブは歩道がない上に路肩が狭く危険なので集落内の生活道を通る。距離はほとんど同じだが、薄暗くなっているのが安全が第一。右には「みなみ子宝温泉」の大きな看板がいつも目に付く。長良川鉄道の「みなみ子宝温泉」駅と併設されている温泉で、長良川鉄道を利用して訪れた客は降車時に証明書を貰うと入湯税の50円だけで入浴できるという。



もう完全に夜だ。「根村洞門」を越えると長い下り坂に変わる。足元を気にしながら、下りは走った。「吉田小学校」前にある花壇は今年も鮮やかに咲き乱れていた。長良川を左から右に渡る「下田橋」では10℃まで気温が下がっていた。暗くなると歩道のわずかな段差でも転倒するので足を引っ掛けないように細心の注意を払って進む。



## 郡上市美並庁舎(54.0km)

4月29日

19時40分

何気なく横を見ると「郡上市美並庁舎」があった。知らないうちにここまで来られていた、こんな感じだ。気温は8℃だ。「美並インター口」の信号で右手を見ると、暗い中ではあるが「日本まん真ん中センター」が高台に見えた。緯度、経度で日本の真ん中にあたる場所だ。ここからは長い下りが続く。いつもは明るいうちに通過するが、今回は暗いので居眠り防止用フクロウの目が光っており、左側の目は点滅で右側は点灯し続けていた。



深戸の手前では「ラーメンみなみ」の赤の看板だけが明々と灯っていたので店内に入る。例によって塩分補給のため、570円の塩ラーメンを注文する。座敷で足を伸ばして食べる。この塩ラーメンの出汁はさっぱりしていて、私好みの味だ。この時、田舎特有の集落全体へのスポット放送が流れた。「日曜日に大和の野外市場で売られていた山菜の中に毒のあるものが売られていましたので、買われた方は名乗り出て下さい」というものだった。必ずしもスポット放送が聴ける範囲の方が買われたかどうかかわからないが、思わず耳を立てて聞いてしまった。最近ではキノコで良くあること



だが、山菜でもそんなことがあるのだと思った。因みに私は一切山菜食べない。店を出ると店の裏側から水が出ている音がしたので、ペットボトルに補給する。すると店の奥さんが「中の水入れましょうか？」とおっしゃて下さったが、この先はこんなことの繰り返しなので「慣れていきますので」と丁重に断った。

「深戸駅」は長良川沿いにある桜並木道の終わり付近にあると認識していたので、この辺りではないかと探したが見当たらなかった。幾ら探しても駅らしきものは見当たらず、結局は通り過ぎていたようだ。何故、駅を探すことにこだわったかというと深戸から大和まで長良川鉄道に乗ってワープしようと考えたからだ。今のペースでは予定よりも相当遅くなり、心配の種になっていたからだ。ほんの少し先に進むと白鳥方面行きの電車が通過した。「間に合ったのに残念」という思いで電車を見上げる。

更に先の東海北陸道高架下でウインドブレーカー上下を着用する。ここはいつも重ね着するか、ウインドブレーカーを着用する場所だ。それにしても、今年は風も冷たくて寒い。これから先は歩道のないところが続く。「名津佐トンネル」は7℃を表示していたが、体感温度はもっと低く感じる。走れないのでひたすら歩き続ける。過去10年では一番多かったのではないかと思えた車の通行量だったが、21時を回るとさすがにほとんど通らなくなった。

「相生」のT字路で橋を渡り、「相生駅」に向かう。一度思ったことは止められなくなっていた。21時は回ったが、もう1本くらい電車があるだろうと予測して、とりあえず電車時刻を見に行くことにした。駅の位置もわからないが、行けば何とかかなと思ってのことだった。駅は踏切を越えて、線路沿いに行ったところで、こじんまりした綺麗な駅だった。最終の白鳥行きが22時20分にあり、電車到着まで50分あまり時間があつたので、次の郡上八幡まで進み、そこから大和まで電車に乗ることを決意する。

何故、深戸から電車を意識したかという、深戸から白鳥までの間は歩道のないところが多い。特に郡上八幡から大和までは路肩も狭く、去年は大和で車道と歩道境目の分離帯に足を引っ掛けて転倒したことが頭を過ぎり、同じことは繰り返したくない。以前にも大和では転倒寸前になったこともあり、ひとりだとリスクを少しでも減らすことも大事だ。しかし、徹夜でひとり走り歩きすること自体、大きなリスクを背負っていることに限りはないが、中でもこの部分は最大のリスクだと思っていた。国道156号線に戻って、3.8km先の郡上八幡駅を目指す。十分に時間はあるので、乗り遅れることはないだろう。

「ドライブイン千虎」、ホテル「郡上八幡」が見え、天然温泉「宝泉」の看板も見える。更にこの先の釣具屋の店先には水舟があるので、例年通り、ペットボトルに水を注ぐ。9時45分頃だが、店内からは人の声がしてくる。いつもライトアップした和食店が右にあるが、時間が遅くて灯は消えていた。左のオートレストランは営業中。ここからは右斜めに旧道に入るが、ここまで来れば駅はすぐそこだ。



## 郡上八幡駅(67.4km)

4月29日

21時59分

外には「郡上おどり」の提灯が釣られているのはいつも通りだが、駅舎内に入ると「ふるさとの鉄道館」と題して、今から60年、70年ほど前の貨物料金表や旅客運賃表、時刻表示板が飾られていた。待合室には昔からのポスターが壁一面に貼られ、水の都・郡上八幡の良さ、人々の生活が紹介されていた。向こうのホームに行こうと橋を渡ると風除けのない角材だけの古い橋だったが、それはそれなりに歳月を感じる趣のある素晴らしい橋だと思った。とりあえず寒いので、ホーム上にある時間待ち用の小屋は戸が閉まるので、そこで寒さを凌ぐ。22時25分を





若干過ぎてから、電車が到着。郡上八幡からの乗客は2名で、車内には1名だけ乗っていた。

ワンマンカーで車内は暖房が良く効き、足を伸ばせられたので快適だった。真っ暗だが、点々とした灯りを車窓から見ながら、何と楽しんだことかと思つた。郡上大和は4駅目で20分ほど掛かった。駅の古さとは別に車内はシートもまずまずで綺麗だった。料金を見ていると10km弱だったが、450円もして「高過ぎ！」と驚く。電車から降りると店から出てきた人がいたので、国道156号線の位置を聞く。そこは私のチェックポイントでもある「J Aめぐみの」前だった。昔、さくら道ウルトラが行われていた時は本田よのさんがエイドを出して下さっていた場所で、ここからなら危険箇所は越えているので安心だ。



環境だけを思うと天国から地獄へみたいな感じだった。国道156号線に出ると昨年までとは一変、歩道が広くなり、拡張工事があちこちで行われていて、夜中なのに赤の点滅灯が眩しくて、逆に前がわからないくらいの状態だ。それも行き止まりが多く、足元が不安だった。しかし、歩道が広くなることは安心できる。ただ、走れる気力、体力はないので、ひたすら歩くことに専念。歩道工事が行われていたのは大和の中心街だけで、そこを抜けると前のままだった。

前方に東海北陸道の高架が見え出した。この区間はいつも長く感じるところで、精神的にもきつい。サークルKでストロベリーヨーグルトを買って、食べる場所を探して進む。店内にカイロが置いてあるか聞いたが、もう時期的に置いていないようだ。右にはコメリがあった。2008年にはここでカイロを買ったことを思い出す。今夜はカイロが欲しいような冷えようだ。東海北陸道高架下を潜り、しばらく進むと明々としたボーリング場が左に見える。8時になれば店の灯りも消えるこの地方で、0時だというのに、ここは別世界状態で何とも奇異に思えた。この隣りには店内が明るいコインランドリーがあるが、時間の関係で鍵が掛かっていた。この隅で風除けし、先ほど買ったストロベリーヨーグルトを食べる。この付近でも歩道工事が行われていた。拡張工事ではなく、路面を綺麗にしているだけだった。車が来ないので、この付近は足場の良い車道脇を進んで走った。空を仰ぐといっぱいの星空だ。今夜から明日朝に掛けてはきつい冷え込みになりそうだ。



「白鳥インター口」の気温は5°C。時間帯が違うので気温うんぬんはわからないが、今までのさくら道とは寒さの度合いは全然違うのは明らかだった。長良川鉄道を越えて民家のある白鳥中心街手前で左折し、「奥美濃大橋」を渡る。昨年は大会だったので、ここを真っ直ぐ白鳥駅方面に向かったが、今年はそれまでと同じコースに親しみを感じていたので、奥美濃大橋から顕彰碑に入ることにした。左には頭上で大きくカーブする「油坂峠道路」の外灯が迫ってくるような感じでそびえている。時間帯の関係か、以前はもっと鮮やかなオレンジ色に思えたのだが、節電のためか、いつもより色が薄く感じられた。

顕彰碑へはややこしい道を民家の間を抜けて行くコースだが、途中で間違っただけか、「向小駄良防災センター」向かいの公園前に出て来てしまい、前には良二さんの奥さんが営まれている民宿「てんご」があった。どこかで左折するところを真っ直ぐに行ってしまったようだ。そして、カーブのところにある家の前を通ると外灯が物をキャッチして、必ず点灯する。顕彰碑前の民家はガラス張りの事務所のような部屋内が明々と蛍光灯が点り、何とも違和感を感じた。そして、何とか顕彰碑に到着できた。

### 桜守佐藤良二君顕彰碑(78.8km) 4月30日 00時40分

やっとの思いで辿り着けた、そんな思いだ。暗闇の中で良二さんの「顕彰碑」を眺める。その横には『さくら道の夢 はるか未来へ ありがとう佐藤良二さん』と刻まれた関島秀樹さん書の碑が新たに建てられていた。関島さんは2003年最後のさくら道ウルトラ後の懇親会ではギター片手に故佐藤良二さんを偲ぶ歌を語り口調で歌われたシンガーソングライターで大津在住の同世代で、ギターの弾き語りを中心に活動されているようだ。横にあるアズ

マヒガン桜の古木「藤路の桜」も眺めてから下って行く。時間的に眠たいので、民家の駐車場で横になれる場所を探す。1ヶ所良いところがあったので、側にあった段ボールを敷いて横になるが、寒さで辛抱できず10分ほどで出て行く。

下って行く道中にある民宿「てんご」前にはかなり幹の大きくなった桜の木がある。良二さんが植えられたものだろう。「向小駄良防災センター」向かいの公園に立ち寄って、7年前の交流会で植えた莊川桜の実生の育ち具合を確認する。手前の方は数年背丈が変わらないような気がした。隅の方は一見枯れたのではないかと思ったが、よく見ると枯れてはいないが、無惨にも地面に枝が這った状態で、何とか生き延びている感じだった。思うように育っていないことに愕然とする。

今度は農機具などの入った大きな作業小屋があったので、奥の方でベニヤを広げて横になる。先ほどよりはマシンだが、寒さは相変わらずで、眠れるところまではいかなかった。完全に入口が閉まっていないと寒さは凌げない。30分ほど休んでいるうちに腹が減ってきた。「向小駄良」交差点で左折し、その先のローソンに寄ってカップラーメンを食べる。ここでもカイロがないか尋ねたが、やはり売られてはいなかった。このコンビニは右側に荷物置き場があり、扉を閉めることができるので敷物をし、ラーメンを食べながら寒さを凌いだ。2時を回り、外は冷たい風で逃げ場のない状態だ。気温は4℃だが、体感には完全にマイナスの世界で今年の比較ではない。

だいぶ休んだので、身体は幾分か走れる状態になっていた。というよりも走らないことには寒くてどうしようもない。車も減多に通らない時間帯なので、転倒の恐れがある歩道ではなく車道の端を進んだ。思っていたより快調に走れていたが、寒さの中での眠気は応える。右に「北濃小学校」が見えた。ちょうどその頃、右に扉のあるバス停を発見。次に寝るのに良いバス停が見つかるかどうかかわからないので、ここでひと寝することにした。下には座布団が敷かれているので、立山マラニックの参加賞で貰ったノースフェイスのタオルケットを被り、2時45分から45分間横になった。それでも隙間風が寒い。とりあえず少しでも眠気を取らなければと思う。

外に出ると相変わらず白山下ろしは強烈で、山の谷間を冷たい風が下りてくる感じの風だ。そのうちに「白山長滝神社」が左に見え、そのすぐ右先のカーブに「道の駅・白鳥」がある。キャンピングカーをはじめ、10数台ほどの車が止まっていた。車中でも寝袋でもない寒さを凌ぐのは大変だと思う。



そして、長良川鉄道終点・北濃駅(85.9km)には4時7分に到着。顕彰碑から7kmを3時間半ほど掛かったことになる。空は心持ち青くなり始めていた。その先のカーブでは2℃の表示があった。寒さで体温が下がったままの状態が続く。高鷲に近づいた頃、道路右側の桜は6、7分咲きだった。いつもと違って遅い桜だ。今年は寒さで開花が遅いのだろうか。緩いが上りが続くのでただひたすらに歩き続ける。空は見る見るうちに明るくなり、4時50分にはかなり明るくなっていた。眠気は相変わらずで高鷲に向かう足取りも重い。

高鷲町商工会館前(90.4km)

4月30日

04時53分

「高鷲町商工会館」前ではすっかり明るくなっていた。ここで右折して高鷲の市街地へ進む。この付近に100円自販機があるのを記憶していたので缶コーヒーを買う。暖かい飲み物がこれほど恋しいとは。何度も休んでいたが、それでも眠気がどんどんやってくる。そんな中、奥美濃地方には立派な造りのお寺が多いが、高鷲でも見られた。いつもは夜中に通るので気付かないが、奥美濃の山里の情景にはびったした。この辺りは石を積み上げた石垣が多く見られた。これもなかなか風情を感じる。



「穴洞橋」手前にあるサークルKで玉子スープを買って、外のベンチに座って飲む。暖かくて美味しい。コンビニの横には休憩用の駐車場とトイレがあり、10台あまりの車が早朝だというのに止まっていた。スキーやボードを積んだ車ばかりでダイナランド辺りへ滑りに行くのだろう。下には「湯の平温泉」があり、桜も今が見頃だった。



ここからは300m上らなければならない。前半と後半だけで、中盤は中弛みできる。6時前になるとさすがに車の数も多くなるが、ほとんどは上りの車だ。大きく巡回するカーブを上って行くとほぼ平坦に近い歩道のある道路に変わる。時折、旧道への分かれ道があり、10年前に初めてさくら道を走った時は新道はなく、旧道を上ったことを思い出す。その新道で今年は土手が何箇所か崩れ、植えられている木々も倒れていた。過去にも何度か確認しているが、新道歩道のガードレールの横パイプは変形して真っ直ぐではない。これは雪の重みで曲がってしまったのだ。何となく通り過ぎると気が付かないが、雪の凄さを感じる光景だ。



その頃、あまりの眠気で足が前に出なくなった。そんな時、都合良く扉のあるバス停が右側にあったので、白鳥同様にタオルケットを被り、また横になって休む。30分ほど休んだが、15分くらいは寝てしまっていたようだ。眠ったことで、だいぶ身体が楽になったように思えた。点する西洞集落が見え、ここは民宿が多い。



左に本堂の屋根の立派なお寺があり、駐車場には雪の山が残っていた。雪の関係か瓦葺きのお寺は見掛けない。5月になろうとしているのに民家の軒先には除雪車が置いてあり、つい最近まで雪が降ったり、気温が低くて溶けなかったりで、片付ける時期が遅れているのだろう。

そこから左に進み、道路幅が狭くなったカーブを下ると「ダイナランドスキー場」入り口だ。今年のさくら道前日にK田さんからダイナランド手前に近道できる橋ができた聞いた。昨年はまだ開通していなかったが、今年はY字路になっており、そのまま直進すれば新しい橋を渡って先に進めた。距離にして100mも短くはないと思う。旧道のダイナランドの青色看板前を通り、蛭ヶ野に向かう。ここには自販機があり、コーヒーを飲んで温まる。



時計を見るとちょうど7時、さくら道ウルトラ遠足がスタートしたところだ。我が目から見るとこんな気楽なさくら道は贅沢な気がしていた。気温は7℃、名古屋と比較すると気温差は雲泥だ。ここからはペアピンカーブの急坂が連続する。この時間になればさすがに車の数は多いが、大型は走っていない分、気は楽だ。ふと後ろを振り返ると赤や青のトタン屋根もカラフルで、山里の素晴らしいパノラマ風景に変わっていた。ここはいつも真夜中でこんな風景を見たのは初めてだ。民宿「銀白荘」や「牧歌の里」の看板が目に入る。年に1回しか逢えないけれど、我がさくら道にとって全てが一期一会に変わらない。道端には黄色が鮮やかな水仙も咲いていて、ひと時の安らぎに思えた。急な上り坂なのに時々走れるようになっていた。疲労が抜けたのかもしれない。



「道の駅・大日岳」に到着。ここからは下りが続くので、しばらくは走れた。左に行けば「高鷲スノーパーク」だ。長い下りが続き「駒ヶ滝」では勢い良く水しぶきが落ちていた。洞門から上の上り坂を見上げると凄い坂に見えるが、実際はそうでもないのが人間の目の錯覚だろう。標高830mの表

示があり、気温は7℃だった。ここから1km上り切ったところが分水嶺公園のある「蛭ヶ野峠」だ。



### 蛭ヶ野分水嶺(100.8km)

4月30日 07時49分

例の如くしっかり太平洋と日本海に分かれる分水嶺を確認する。こんな明るい時間に分水嶺を見られるのはいつ以来だろうか。厳寒さくら道以来か？。空気は冷たいが澄んでいる蛭ヶ野の朝は清々しくて気持ち良い。例年になく今年の山々は雪が多いのが明らかだ。7時50分、分水嶺の横の喫茶「わたすげ」が開店していたので入る。ペンションと一体になっている喫茶のようだ。モーニングを注文するとバナナも一緒に出て来た。暖かい店内で新聞を見ながら、コーヒーとパンを食べる。今、金沢を目指して走り歩きしている人間がすることだろうかとも思えるが、大会ではなく、ひとりさくら道だからのささやかな贅沢だと思えば良い。



このままじっとしていたいような気分になる。マスターに「どこまで行かれるのですか？」と聞かれ、「一応、ひとりで金沢を目指しているのですが、どうなることやら」と応える。いろいろ話を聞いていると今年は連日気温が低くて雪がなかなか溶けないそうだ。昨日も雪が舞っていたとのこと。それは寒いはずだ。「ネイチャーの時も寒かった」と話されていた。マスターから「気を付けて」と声を掛けて貰い、30分余りして店を出る。



8時半頃だというのに空はどんより曇っていた。高原なのでこういう天気かもしれないが、今日の天気も怪しそうだ。道路脇にはまだ除雪車が置いてある。つい最近まで使われていたのだろう。さくら道沿いでは、ここ蛭ヶ野が一番の豪雪地帯だから、それも納得できる。ダイナランドの大日岳や高鷲スノーパークは雪が



いっぱいあったが、「蛭ヶ野スキー場」には雪はなく、ただの草原になっていた。蛭ヶ野高原を進むと何とも言えない独特の気持ち良さがあるのは何故だろう？。

郡上市から、高山市に市境の気温は9℃まで上がっていた。いつもはマイナスの中で通過するので、10℃以上も高いと違うところみたいな感じがする。その先にあった「ようこそ そばの里庄川へ」の看板がやけに目に付いた。左に始まったばかりの庄川の清流を見ながら、長い下りをゆっくりと走る。足取りは重い、休んだ分身体は楽になっていた。御手洗、野々俣、滝ヶ野と続く集落はいつ見ても長閑で、普段はどんな生活をしているのだろうか？。どこで働いているのだろうか？。冬場は大変だろうな？。用心が悪くないだろうか？。何て思ってしまう。山間でわずかな民家だけの長閑な集落を見る度に、いつも感じることだ。外から見るほど、そこに住んでいる方々は不便を感じていないのが現実だろう。



毎日、オドンいっぱいの空気を吸い込みながら、自然と向き合った生活は心がのんびりできることだろう。下り坂の中間くらいまでは走れたが、その後は走るのが辛くなり、歩いた。それにしても人影のない集落だ。

その後、「であいの森」があり、一気に急な下り坂に変わる。下り終えると牧戸集落だ。「飛騨INFO庄川」を過ぎ、

牧戸橋手前では大型バイクの集団とすれ違った。10時になろうとしているのに空はどんよりしたままで、青空はいつになれば顔を出してくれるのだろう、そんな天気だ。牧戸バス停手前の自販機で缶コーヒーを買い、牧戸バス停のベンチで飲む。最近はこのパターンが続いている。  
 牧戸バス停のある「牧戸」T字路



を左折すると一気に車の数が増えた。東海北陸道の荘川インターも近く、高山方面側からの車も合流するところで、大型トラックも多くなる。いつものことながら、牧戸の山々と田園風景は時間が止まったような感じがある中に自分があるみたいな気分させてくれる。そんな中、山間の集落に泳ぐ鯉のぼりの靡く姿が鮮やかだった。さくら道の中ではこの風景も大好きだ。

右側にあった「シュラ紀の化石群地」の石碑が今年にはなくなっていたように思えた。見落としたのかもしれないが…。左前方にはシルバーの岩瀬橋が見えてきた。緩く上って、下った後、左にカーブすれば真正面に「岩瀬橋」だ。俄然、今までが嘘のように元気が出てきた。車が多くなってきたので、前後には十分注意を払って進む。大きなトラックも走っているの、その場合は端にへばり付くように立ち止まる。橋の真ん中で左右を見渡した時、御母衣ダムの壮大さに吸い込まれそうになるのはいつものことだ。さくら道に来て良かったと感じ始める瞬間でもある。



橋を渡ればすぐに古い「岩瀬トンネル」が1号から3号まであり、1号は水が天井からポトポト落ち、どこも路面は粗く危険なトンネルだ。車が前後から次々と走ってくるので確認しながら歩く。白樺の木が見え始めるとドライブイン「みぼろ湖」はすぐ先にある。向側は鮮やかなログハウスが並んでいる。可憐な白色の水芭蕉も目に入る。車とツーリングのバイクが多い。どれも飛ばしているの、端を走り歩きしていても怖く感じる。時間帯のせいだろう。



「万象寂静水没之碑」「水没記念碑」が並んでおり、「乳母谷橋」「小谷橋」を越えたところが、御母衣ダム湖の上に雪を被った白山が見える最初のポイントになる。鮮やかに雪で覆われた白山が見え始めてきた。いつもなら真っ青な空に映える積雪の白山だが、今年は曇り空なのが残念だ。「大サコ橋」を越え、荘川桜のテントが見えた時、過去にはなかった新しい目に止まる「荘川桜」の看板が立てられており、200m先と表示されていた。薄青色の「宮谷橋」を渡ると突然目の前に「荘川桜」が現れる。

## 庄川桜(115.5km)

4月30日 10時52分



今年の荘川桜は過去では一番成長が遅かったのではないかと思うくらいのつぼみ状態だった。気温が低かったためだ。結局、満開になったのは2週間先だったようで、今年は花びらが少なく、物足りないようだ。荘川桜のブログにはあった。しかし、つぼみであろうが、花が咲いていようが、散っていようが、奇跡の荘川桜は人を引き付ける魅力ある桜であることに代わりはない。時間帯のせいもあると思うが、例年になく見物客は多かった。手前にある形の良い「照蓮寺桜」と奥側の「光輪寺桜」を今年も見られたことに満足だ。樹齢450年の古木とあって、水が幹に入れば腐ってしまうため、幹に開いたであろう穴部分には防腐剤がたっぷり流し込まれていた。

荘川桜自身の生命力とそれをサポートする多くの人の関わりがあってこそ、人間の寿命をはるかに超えて生きて



いられるのだ。樹木の寿命からすれば人間の生命力はわずかだが、このような古木の持つパワーを人間はもらって生きているはずだ。

出店が出ている光景も初めてだった。美味しい臭いがしていると思うと飛騨牛の串焼きが焼かれていたので、思わず食べたくなった。ひと串400円、やっぱり牛肉は美味しい。



駐車場にも車やバイクが多く停まっていた。バイクの多さが目立つ。腰を下ろして串焼きを食べていると駐車中の大型バイクが重みで転倒し、持ち主の男性がいくらセルを回してもエンジンが掛からず、青ざめていたが、しばらくして何とかエンジンが掛かってひと安心みたいだった。そんな時、後ろに乗っていた女性の動じない落ち着きが目に付いた。



がないので一番危険な橋でもある。下はコバルトブルーの水が鮮やかだ。風が強いと谷間になるので、吹き飛ばされそうになる橋でもある。

古くなった尾神1号から3号までのトンネルでは車が通る度に立ち止まって通り過ぎるのを待った。車が多いので立ち止まる頻度は高い。古いトンネルはどうしても路面が粗くて進みにくい。トンネルとトンネルの間に見えるコバルトブルーの御母衣ダム湖は本当に綺麗だ。空は徐々に暗くなっていた。この付近から残雪が目立つようになり、こんなと

牛肉を食べて少し元気になったので走り出す。空は少し青空も出始め、暑くなってきた。走れたのはわずかで、いつも通りの歩きになってしまった。遠くに御母衣ダムらしき姿が見えるが、くねくねしたダム湖畔の道は先が長い。車やバイクが多いので、前に後に注意を払って先に進む。ようやく「尾神橋」に差し掛かる。御母衣ダム湖畔では一番長い橋で、同時に路肩





ころに思うようなところにも雪は残っていた。外れないと見えない洞門の上や周りには雪が散乱している状態だ。いつもは結構走れる1106mの「福島保木トンネル」でもほとんど歩いた。トンネルを出ると目の前の山裾にも雪がいっぱい残っていた。こんな残雪はこの10年で初めてだろう。



御母衣ダム湖の向こう斜面でも大きな山崩れの跡が残っていた。高鷲でも土手がずれていたが、さくら道で何があったのだろうか。どんよりとした天気は続き、天気予報の晴れはどうなっているのだと思ってしまう。ここは山だから、天気予報はアテにならないのか。御母衣ダムが近づいて来た。コバルトブルーの湖面が例年に比べてより鮮やかに思える。少し古くなった「福島1号トンネル」を通過するとい



つも通り、ダム湖側に出る。この左側が「福島2号トンネル」になる。風が強くなり始め、雨がポツポツと落ち始めてきた。空は真っ黒になって、回復は見込めそうになくなった。平瀬側も真っ黒だ。稲光がして、強烈な雷もなり始め、この先を案じる。

そうしているうちに強い雨風が変わったので、運良く福島2号トンネルと福島3号トンネルの間で雨宿りする。腰を降ろして休みたいがホコリだらけなので、立ったまま、前を通り過ぎる車を避けながら、時間稼ぎするのみだ。取りあえず、小止みになるまでここにいるしかない。約30分この状態が続き、やっと小止みになったので、新しくできた「福島3号トンネル」を進む。路肩には歩道もあり、明るく足元も全然今までと違い快適だ。2008年11月に通り過ぎた時、新しいトンネルが建設されていることに気付いたが、あれから2年半してようやく通れるようになっていた。



### 御母衣ダム(123.3km)

4月30日 13時10分

蛭ヶ野からかなり時間が掛かってしまった。トンネルを出ると大パノラマが見える。雨もほぼ止んだ。濡れた路面で滑らないよう注意してS字カーブの急坂を下って行く。目の前の「御母衣ダム」を見上げる。まさに壮大な光景だ。今はどうか知らないが、かつて東洋一といわれたロックフィル式の御母衣ダムは自然とエネルギーの共存のように思える。御母衣ダムは完成から今年で50年経ち、高さでは9番目だが、貯水量は全国2番目を誇る巨大ダムだ。電発のシルバーの屋根が光り、御母衣集落が小さく見える。

やや雲が切れ始めたように思えたが、時間もあるので「御母衣電力館」に寄ることにした。いつもは前を通り過



ぎるだけだが、これはもったいない気がした。横には御母衣発電所で使われている赤の「水車羽根」が置かれていた。また水を堰き止めている岩石も山積みされていた。補修用のものだろう。

電力館の入口は反対側にある。この時、また凄い雨が降り始めた。中では手作りパンが売られていたのでサンドイッチを買い、缶コーヒーを飲みながら、2階の窓越しに御母衣ダムを眺めて時間を過ごす。真っ暗な空に横殴りの雨で、雷も鳴っている。もう待つしかない。中は暖房されていて、疲れた身体を休ませるには最高の場所だ。「たくさんの心が救った老桜」と題して御母衣ダム建設によって水没する中野地区の人々の葛藤とその村のシンボルだった荘川桜の前代未聞の大移植の様子がパネルに収められていた。

御母衣シアターでは150インチスクリーンで約18分、御母衣ダム建設と荘川桜移植の心温まる物語「桜守の詩」を紹介するドキュメンタリー映画が放映されていたので見る。改めて荘川桜が単なる樹齢450年



の桜の古木ではなく、感動の歴史を背負って生きてきた老桜であることに歴史的な意味があると感じさせられた。相変わらず、強い雨は降り続き、いつまで待機していれば良いのだろうと思うようになってきた。館内には莊川桜の四季の写真展や発電アドベンチャーの展示もあった。こんな天気なのに多くの人が入館されていた。



入館してから2時間30分経ち、雨が小止みになったので15時50分頃に出発する。この先、雨が強くなっても進むしかない。デイパックの中に昨年の立山の時、百金で買ったポンチョが入っていたので、雨風を凌ぐために重ね着する。しかし、大き過ぎると風が強くてまともに着ている効果はない。いつもなら、周りの風景を楽しみながら通り過ぎる御母衣集落だが、桜が満開だった以外、強い印象は残らなかった。重厚なたたずまいの「御母衣旅館」の横を通り過ぎると白山が大きく見え始めるのだが、この天候なので雲の中だ。



合掌造りの食事処を過ぎ、国の重要文化財「遠山家」が真正面に見える。いつもは撮影する遠山家も雨の中ではシャッターも押せない。走ったり、歩いたりを繰り返しているうちに平瀬温泉の旅館の看板が見えて来た。左には白山登山口があり、見上げると日本三名山のひとつ・白山が大きく迫るのだが、雪を被った山が薄っすら見える程度だ。莊川桜を過ぎてからはトイレに行く回数がめっきり増えるようになった。明らかに脱水の症状だと思えた。

旧道と新道に分かれ目に「大白川の湯・平瀬温泉」のモニュメントがあり、今年は道の駅に寄りたいため、旧道の温泉街は通らずに、そのまま新道を進んだ。「大白川温泉・しらみずの湯」の看板が見えた。2008年11月の雪の厳寒さくら道では20時頃から、ここの温泉に入ったが、入口手前で凍結した路面に滑って顔を擦り剥いた



苦い経験を思い出す。その横に隣接する「道の駅・飛騨白山」は予めHPで調べるとレストランで飛騨ラーメンが食べられると書いてあり、それを楽しみにここまで来た。しかし、レストランらしきものもなく、食べる場所は立喰いメニューのみ。



ラーメンはしらみずの湯の食堂かもしれないと行ってみるが、HPで見たラーメンはなかった。仕方なく、飛騨牛の串焼きと五平餅を足湯に浸かりながら食べる。ラーメンを楽しみにしていただけにガッカリだ。この先は白川郷まで何もないので余計に意気消沈気味になる。足湯から上がり、足に貼っていたカットバンとバット状テープを全て剥がして貼り替え、片方だけ持っていた左足の靴下も取り替える。その頃には雨も止んでいたの、ポンチョは脱ぎ捨てる。もう17時前で、こんな天気のせいもあり、薄暗くなり始めていた。



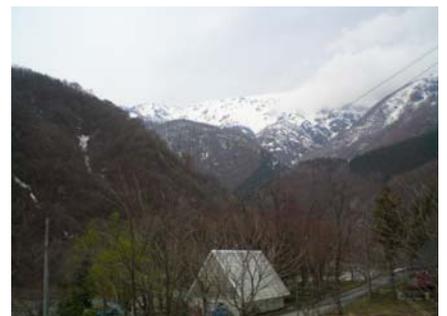
雨も上がり、空も黒い雲が透き始めていた。やっと雨が上がったという感じだ。しかし、左足が痛くて、ほとんど走れなくなっていた。旧道と新道が合流する地点にもモニュメントは建っている。しばらく進むと鮮やかとは言い難いが白山が真正面に見えて来た。そして、小さな水車と黄色の看板が目につく「白川郷深山豆腐店」前を通り掛かる。この豆腐屋は豆腐ではなく、「豆腐」だった。初めて気付く。

「帰雲城跡」が見えて来た。「かえりもじょう」と読む。2年前の道中記を書く時に帰雲城の歴史を調べた。1585年にM7.8の巨大地震があり、城下町は一瞬にして土砂に埋まったという。その土砂の下にはかなりの金や財宝が埋まっているとの伝説から、幻の帰雲城と呼ばれている。この付近は元々、岩盤が弱い地域



のようだ。ここは独特の寂しさがああり、夜に通ると怖そうだ。風雨の後、車は極端に減ったようで進みやすくなって助かる。

その先の日陰になる道路脇にはかなりの残雪があり、この辺りでこんなにも雪が残っているのは初めて見る光景だ。日中の気温も低いのだろう。左足裏の痛みは尋常でなく、どこかで立ち止まってケアしたい。「シッタカ橋」を渡り、さらに進むとやっと「野谷橋」に辿り着けた。ここから見る白山がさくら道では一番だと思っている。18時を



回り、少し薄暗くなった。青空とまではいかないが、雲が切れ始めて、やっと白山らしい姿を見ることができた。

少し進むと両側が林のところ腰を下ろせる場所があったので、座って左足裏を見ると角質の中に肉刺ができたのが痛みの原因だった。水を抜いて、再び進んだが、全然思うように進めなかった。日が暮れるのも時間の問題で、この状態では先に進むことは困難だ。右側に「鳩谷ダム湖」が見え、「鳩谷ダム」は1ヶ所から勢い良く真っ直ぐに水が落ちていた。この先は長い下りがあるが、全く走ることはできなかった。洞門を越えると橋が見え、渡った右にトイレがある。入り込んだところには店があるが、もう閉まっていた。ここのトイレは腰を下ろせる場所があるので、ここで肉刺のケアをするが、焼け石に水だった。「白川郷合掌集落」の石碑を右に進み、合掌集落へと入って行く。



## 白川郷分岐「合掌集落」(139.5km) 4月30日 19時06分

真正面には合掌集落の窓から放つ黄色い温もりのある光が鮮やかで、こんな白川郷は初めてだった。この時間帯に通過することは今まで一度もなかったからだ。この辺りの夜は早いので、道を歩く泊まり客の姿もまばらだ。この先、どうしようか？。いろいろ頭の中が錯綜する。白川郷で泊まれるところがあれば泊まろうか？。GW中なので、空室はないだろう？。空いていたとしても1万円くらいはするだろう。予定外の出費は避けたいが、寝るところがない。バス停はないだろうか？。

さくら道コース沿いに「白川郷の湯」があるはずだが、19時も回っており、一体何時まで空いているのか。白川郷の湯は宿泊施設もある。食事もできるだろうから、温泉に入って、温かい物でも食べたい。ただ、空いている時間が気になる。暗くて場所がわからず、その辺りの人に聞くと快く教えて貰えた。すごそこみみたいな言い方だったが、聞いたよりは遠くに感じた。そしてやっとの思いで19時半、「白川郷の湯」に到着する。



ウェアを脱ぐのが大変だ。足裏の肉刺が痛いので、床に足底を付けられない。そんな中、苦勞して辿り着いた温泉に入って疲れを癒し、夕食はラーメンライス。道の駅・飛騨白山で食べ損ねただけにラーメンへの思いは強い。何といても水分不足と疲れた身体のために出汁を思い切り飲みたかった。体力回復のためにニンニクをいっぱい入れて、座敷で食べるこのラーメンの美味しさはまさに贅沢過ぎる。思い切り足を伸ばせるこの有り難さ。もう私のさくら道は完全に終わっていた。今夜泊まる場所は道の駅・白川郷のベンチに決めた。白川郷の湯を出る前に明日の高速バスの連絡先と時間を聞く。高速バスは予約制なので、万が一乗れないことがあればいけないので押さえる必要がある。しかし、バス会社に連絡するも時間が遅くて通じなかった。

「白川橋」を渡った先にはデイリーヤマザキがある。ひとりさくら道お疲れ様をひとりでするため、缶ビールとつまみを買う。袋を下げて、トボトボと旧道から道の駅を目指す。かなり寒くなっていた。いつもそうだが、旧道を通ると勢いよく流れる水の音がし、溝から溢れんばかりに流れている光景に出会す。この通りに白い建物の昔ながらの「白川村役場」がある。

20時過ぎに「道の駅・白川郷」に到着。今夜の寝場所だ。休憩所の中に入ってベンチがベッドになる。ここは2008年厳寒さくら道の際にしばらく休憩して、束の間の寒さ凌ぎならでできることは身を持って知っていた。この先に進んでも、もう何も無い。自販機は道の駅・上平ささら館までない。小白川集落まで行くのもひと苦勞だし、何といても足がないのは致命的で、止めるにはここは最適な場所だった。あとは寒さだけの問題だ。

## 道の駅・白川郷(143.5km) 4月30日 21時49分

### ■白川郷にて、ひと晩野宿

いつものことだが、駐車場には多くの車が停まっていた。アウトドア派が増えたのか、キャンピングカーも目立つ。白川郷の湯で食事していた宮崎からツーリング中のバイクの男性はここでテントを張って寝るようだ。

この休憩所は一方はガラス戸が締まるが、もう片方は遮るものがない渡り廊下風になっていて、その奥にはトイレがある。トイレが近いのは有り難いのだが、どれくらい寒いのか想像もつかなかった。まずは自らの足でここまで来られたことと身体への労をねぎらい、缶ビールで祝杯する。何せ薄着なので寒いが、ここで終われるかと思うと安堵のため息が出る。

上に被れる物はノースフェイスのタオルケットしかない。できるだけ風が入って来ないであろうベンチで横になって目を瞑る。時折、人が前を通るが、ガラス戸を閉めずに通り過ぎる人がいて、自動で閉まってくれないので、何回も都度閉めに行く羽目になった。トイレも最初は30分に1回くらいの割合で行った。夜中の2時頃から雨が降り始め、間もなく雨風は強くなり始めた。外の自販機には温かいカップのコーンスープが売られており、冷えた身体にはこれが一番だったが、自販機のコインを入れるところは屋根がなく、買いに行く度に雨に濡れる羽目になった。

トイレに行ってはコーンスープを買うを繰り返す。寒いので振るえながら夜明けを待つのみだ。ただ、雨で湿度が高かったせいか、思ったほどの寒さではなかった。前日に比べると夜中の気温は10℃近く高くなっていたのは幸いだった。前日の4/30なら3℃くらいだったのが、5/1は13℃前後と大きな差で、この前後では5/1だけが極端に高かったようだ。これも幸運だったといえよう。

何時頃かわからないが突風のような風が吹き、テントが吹き飛ばされそうになったようだ。風はヒューヒューという音を立てるほどの強さだった。3時頃からは疲れで少し眠れたように思えた。そのうちに徐々に明るくなり始める。

窓越しに外を見ると相変わらずの雨風で、とても止みそうな雰囲気ではない。

明るくなって、そろそろトップが通過するのではないかと外を眺めていると、道路向こう側の歩道を黄色のウインドブレーカー上下のランナーが力強い足取りで通り過ぎて行った。強い向かい風と雨の中、安定したフォームで走って行かれたのは昨年2位だったN嶋S佐久雄さんだったようだが、60歳を過ぎられてもこの強さ、その姿に感動した。数分後、トイレに行くとゼッケン1番のY口さんに会う。昨年ダントツのトップでゴールされた方だが、今年の調子は今ひとつみえた。

6時15分頃、ベンチに座っているとお塩師匠が5番目で道の駅に到着。温かい紅茶を飲みたいと言われたので、一緒に自販機に行くが、間違っって冷たい紅茶を買われたので、温かい紅茶を買って交換する。手持ちのおにぎりを食べて出発された。この時は5番目だったが、最終的には2位でゴールされ、改めて、お塩師匠の精神力に感服するのだった。お塩師匠が休憩されている間に女子トップのK村さんが通過されて行く姿が見えた。



ベンチの隣テーブルには幼い子供2人を連れた男性と飛ばされそうになったテントで寝ていた男性2名が親しく話していた。彼らは別々の行動だったが、たまたまここで合流したみたいだった。子連れ男性は知り合いがさくら道に参加しているようにも見受けられた。「野辺山が中止になり、どこに出ようか」何て話しているし、トレイルランナー・鍋木さんのセミナーにも参加した、こんな天気なのに今日も大会があるとか、そのような話が聞こえる。トレイルを中心に走っているランナーのようで、彼らは若く伸び盛りようだった。

腹が減ってきたが、何も食べる物がないと思っていたら、デイパックに焼肉の缶詰があることを思い出し、箸もないので手掴みで食べる。空きっ腹だったので美味しい。カップラーメンの自販機でもあれば有り難いのだが、そうはいかない。外は土砂降りになってしまった。そんな時、ひとりのランナーが道の駅のベンチにやってきた。彼は北海道からの初参加者で民宿・さとうでレースは終えたそうだが、その後白川郷まで車で送ってもらい、取りあえずここまで歩いたそうだ。寒いので手にはカイロを持っていた。同じく北海道から参加の知人は今もまだ走っているようで、気になる様子だった。彼は来年もさくら道に参加すると話しており、この秋は村岡に参加したいとも言っていた。

道の駅の土産物店は8時前に開店したので、パンを買う。傘を買おうかと思ったが、高かったので止めた。9時になったので、金沢行き高速バスの北陸鉄道に彼の分も含めて2人分予約する。バスは10時20分発なので、9時半に強い雨の中を歩いて、白川郷の「せせらぎ公園」に向かう。せせらぎ公園は迂回しなければならなく、3km以上あった。途中のデイリーヤマザキに寄り、車中で食べるための豚バラ丼を買う。

## ■白川郷～金沢ゆめのゆ

さすが世界遺産・白川郷は雨の中でも観光客は多い。「であい橋」を渡った先にせせらぎ公園はある。せせらぎ公園までは雨風が強かったが、着いてからは小降りになり、止もうとしていた。空は曇っているが、被われていた黒い雲は徐々に切れ始めていた。予約のチケットを買おうとしているとN西さんの姿があった。もうバスは待っている。他にも何人かのリタイヤ者がいたが、バスの乗客はわずかだった。金沢まで1800円は安いと思う。バスが





出発するわずかな時間に合掌造りと桜の写真を撮る。地面は濡れているが、合掌造りと桜、見事なコントラストだ。

10時20分の定刻にバスは出発、道路脇に咲いている桜が雨に濡れてより濃いピンクに見えた。道の駅・白川郷手前から、白川郷インターに入り、東海北陸道を一路金沢に向かう。トンネルを越えると飛越峡合掌ラインが見え、鮮やかなコバルトブルーの庄川



のせせらぎの向こうには薄っすらと積もった山々の雪が見え、先には「合掌大橋」も見えた。小白川の集落の先にある道の駅・上平ささら館手前のカーブも見えた。かつては自分の足で進んださくら道、今となってはどれもこれも懐かしい思い出でしか浮かんで来ない。



この先にある山寺の「行徳寺」、合掌造りで国重要文化財の「岩崎家」「民謡歩道」「管沼合掌集落」「上梨・こきりこの里」「村上家」、通り過ぎれ



ばやはり自分の足で進んで見たかった、遭いたかった思い出ばかりだ。そうしているうちに熟睡に入っていた。高速バスは金沢西インターから金沢駅に向かい1時間で到着した。金沢駅からは白川郷で出会った北海道のランナーを中橋バス停まで案内して、そこからはひとりで金沢ゆめのゆに向かう。勝手知ったる身なのでひとりの方が気楽だ。

マックスバリューに寄って、メンソレタムと缶ビール、つまみを買う。ゆめのゆ内のビールは高いので88円の缶ビールを3缶買った。その後、すき家に寄ったが、ほぼ満席で注文してして順番を待っていると店員が、私の分を今店内に入ったばかりのおっさんの前に運び、そのおっさんは気にもせず食べ始めた。店員に「順番が違う」と文句を言ったが、店員は知らん顔していたので腹が立ち、牛丼は出来上がっていたと思うが、店を出る。最近ではマナーの悪い店員が多過ぎる。

## ■金沢ゆめのゆにて

怒りのまま、藤江バス停付近で左折し、ゆめのゆに向かう。「金沢ゆめのゆ」には12時40分頃に到着した。フロントで送っていたバッグを受け取ると「マラソンの方ですか？」と尋ねられたが、「違います。個人です」と応える。どさくさにまみれてただで入館するランナーがいるかもしれない。ルネスで行われていた頃、応援という名目でただで宴会に出席していた人を何人か見たが、とても気分が悪かった思い出がある。

着替えするにも、毎回フロントに預けるのが面倒なので、つついさくら道ウルトラの荷物置き場兼休憩室に入り、荷物を置き、温泉風呂に行く。ひと晩ベンチで寝た疲れた身体に温泉はあまりにも贅沢だった。N西さん、T口さん、映画村さん、silkさんら知り合いの姿があった。N西さんは白川郷から一緒だったが、他の方々は白鳥の「民宿・さとう」でリタイヤ者が多かったので、さとうの奥さんが「これだけの人数いたら、バス1台チャーターしたら」ということになり、ひとり2000円で観光バスに乗ってさくら道のコースを辿り、ランナーを応援しながら、ゆめのゆまで来たようだ。何とも贅沢なりピーター同窓会だったようだ。この4人の方はその日のうちに家に着きたいと帰ら

れた。

その後、生ビールを飲みながら、自らにお疲れという意味を込めて、鉄火井と鯖寿司を食べる。美味しい。リクライニングの1階でテレビを見ながら寝たり、新聞を読んだり、モバイルで経過を打ったりして時間を過ごす。控え室ではM井田さんに声を掛けられた。自分の中では顔に見覚えがないため、記憶にないのだが、昨年のさくら道の郡上八幡駅で追い着かれ、その時に私の2003年の文集を読んだとゼッケンの名前を見て、話し掛け人だ。彼は2003年に走り、私よりも1時間早い、42時間台でゴールしている。相手は記憶にあっても、自分に記憶と印象がないと食い違うものだ。



東日本大震災で被災されながら、さくら道参加を決意された香峰さんご夫婦とも1年振りに再会できた。震災から1ヶ月半、まだまだ大変だろうが、共に大好きなさくら道で会えたことの喜びの大きさを感じた。その辺りをうろうろしているとN川さんの顔が見えた。1年前、岐阜と御母衣ダム湖でバイク応援してもらったが、今年は忘年会でmasaさんに頼んで参加させて貰ったと話されていた。どこまで行かれたのかわからないが、結果的にはリタイヤだったようだ。控え室に行くとお塩師匠がゴールされていた。白川郷では5番手だったが、結果的に2位でゴールされた。常に負けまいとする精神力は私より年上ながら、敬服するばかりだ。K村さんの姿もあった。余裕のゴールだったみたいで、昔と変わらない凛とした美しさはさすがにさくら道の女王だ。

10時頃からウツウツし、1階のリクライニング室で寝た後、いつも通り3階の畳の部屋でシーツを被って寝る。朝4時に目覚めたので、風呂に入った後、塩ラーメンとおにぎりですぐ朝食を摂る。いくら食べても腹が減ってしまう。そして、そろそろゴールするランナーも徐々に増えて来る頃だろうと思い、外に出る。

そして、若干、西の空が明るくなり始めたその瞬間だった。真正面によくよくと大きく傾いた身体を何かで支えている人が見えた。まさかランナーだとは思わなかったが、周りの様子からランナーであることがわかった。それは信じ難い光景だった。



4時47分、左に45度くらい傾く身体を杖で支え、目の前にありながら、遠いゴールを目指されるタマゴンさんの姿が目に入った瞬間、目が点になり、身体が硬直するような感動を覚えた。知らない人でも感動するが、知り合いとなれば感動の度合いが違い、自分自身と置き換えるようになる。石川県境からと聞いたので、この姿で25kmをキロ15分くらいで歩かれたのだろうが、凄過ぎる。この瞬間は今年の反省をもとに、もう一度初心に戻って攻めの姿勢で来年は大会に挑戦したいと思った。その後、6時台になると続々ランナーが見え、次々とゴール。やっほ～さん、もりけんさん、こがみちゃんは一緒にゴール。もりけんさんは2年連続完走、やっほ～さん、こがみちゃんは昨年の雪辱を晴らしたゴールだった。



チェックアウトは11時なので、ゴロゴロして11時前まで過ごす。ゴールしたランナーの笑顔を見ると、自分のいる場所でないことを感じ始める。masaさんは「多くの参加者が帰り、料理も余っているので懇親会に参加したら」と気遣って下さったが、参加費も払っていない勝手にさくら道を走って者が、そんなところには参加出来ないし、チェックアウトの関係もあって丁重にお断りした。昨日昼にゆめのゆに着いた時と、あれから1日経過した今とでは、自分の立場が違うように感じていた。

## ■ 帰路

11時前に金沢ゆめのゆをチェックアウトし、藤江バス停まで歩く。ここで北陸鉄道バスの自動検知システムはバス停に立ってある無線でバスを感知し、1つ前のバス停まで来たか、2つ前のバス停まで来たかを知らせる仕

組みのようだ。ひとつ賢くなれたか？という感じだ。中橋バス停で下りて、金沢駅前の「アパホテル」の喫茶は無線LANが使えるので、そこで時間を潰すことにする。2時のサンダーバードでみんなで帰ろうと約束していたので、それまでの間、時間はたっぷりあるので、今回のさくら道のことも新鮮な状況でブログに書くことができた。

金沢駅構内に「吉野家」ができていた。これは便利だ。しかし、吉野家で食べるのは本当に久しぶりのこと。缶ビールとつまみを買ってホームで待っていると電車が入ってきたが、こがみちゃん達の姿は見えない。「タクシーで駅に向かっているが、間に合いそうにない」との連絡が入り、ひとりで帰ることになってしまった。隣の席の3人組もさくら道に参加した関西のメンバーだったが、面識のない方々ばかりだった。車内でももうひとつすっきりしないまま、17時過ぎに帰宅する。

## ■10回目のさくら道を終えて

衰えを強く感じた2011年ひとりさくら道だった。日々走っていてもロングの練習は全くしていなかったし、少し長い時間走り続けると息が持たなくなる。ピークが過ぎたといえればそれまでだが、それを受け入れられない自分自身がどこかにあるのも事実。そのギャップを十分に認識していないがため、「何故なんだ？ どうして何だ？」になってしまう。さくら道に行くまではそこそこ頑張っていたが、帰ってから、極端に走れる体力が衰えたように思える。気のせいでも何でもなく、事実だ。毎年さくら道から帰ってくる度にダメージの大きさからだろうが、体力が落ちて、その後の走りに影響を与えている。今年は極端だった。

時間のギャップはものごとを冷静、且つ客観的に見られるようになる。金沢ゆめのゆで見たタマゴンさんのゴールシーンは感動的で、自分があたかもそこでゴールしているような感じになった。その瞬間に立ち会い、来年は私も10年前と同じように自ら感動のゴールシーンを演じたいと強く自分にいい聞かせ、それを実現しようと思った。

かつてアイアンマンに憧れ、何年間かは琵琶湖アイアンマンの追っ掛けをしていた。バイクで追い、ランしながらゴールを目指すトライアスリート達を応援した。何年前だか覚えていないが、ゴールが長浜・豊公園だった頃、日が暮れたライトの中、ひときわ歓声が上がったと思ったら、立つこともできずに四つん這いになって必死で目の前のゴールを目指す男性の姿があった。その男性のゴールシーンは今も焼き付いていて、自分もこれくらいできるランナーでありたいと思った。

それはあくまでもその瞬間と余韻に浸る時間の長さ分だけはその気持ちだった。アイアンマンの時は四つん這いになってゴールしたは良いが、その後にも体調に異変が出て大変なことになるとも限らない。さくら道後、時間が経過し、思うように走れなくなり、身体のガタに気付き始めると憧れから、現実の自分を冷静に見るようになっていく。あれから2ヶ月、10km走り続けることさえできなくなっている自分があった。

今年、大きな間違い、勘違いをしたことに金沢ゆめのゆを去る時に気付いた。大会参加者でもなかった私はゆめのゆで少しくつろいだら、その場を後にしなければならない立場だったことを忘れていた。ずうずうしくも参加者の控え室に入り込んで当たり前のように荷物を置かせて貰った。してはならないことだった。立場が違っていることに気付かなかった。確かに大会に参加している知人は多くいたが、そのことと私がひとりでさくら道を走っていたことは全く関係のないことで、たまたま1日違いで同じコースを走っていただけのことだった。その違いに気付かず、勝手に同じ枠の中に入れてしまおうと思ったことは大変な過ちだったと強く反省している。

どういう形であったにせよ自分自身にとっての10回目のさくら道は大きな転換期が来たことを認識させられ、来年以降をどうするか思案している。今までの概念を捨てて、もっと楽しめるさくら道であっても良いのではないかと。新しい発見、新しい出逢いのあるさくら道であっても良いのではないかと考えている。